

近代民衆における自立の構造——加賀象嵌職人の場合

【要約】

本稿は、近代民衆の自立の構造を、加賀（金沢）の象嵌職人の日記（『米澤弘安日記』、明治～昭和期）を事例に分析する。まず、近代民衆像をめぐる近代史学の論争を、安丸良夫の通俗道徳論を中心にレビューする。そして、近代民衆は、生活の自立をめざして固有の生活倫理を実践したこと。その際、搾取や抑圧と闘って自立をめざした民衆と、闘わずに、もっぱら生活倫理を実践して自立をめざした民衆がいたこと、つまり、民衆の自立には2つの回路があったことを論じる。

次に、生活史法としての日記分析の方法について説明する。次に、闘わない民衆の事例として、弘安の自立の構造を、生活倫理の分析により明らかにする。生活倫理の徳目として、生計の維持と家族の平穩に対する〈責任感〉、責任を全うするための禁欲的な生活態度としての〈勤勉〉、生計の維持を確実にするための、象嵌細工の新分野開拓をめざす〈革新〉、生計の維持と家族の平穩の確かな展望を得るための、仕事や近隣の身近な人々との〈和合〉、その反面としての、不幸な境遇にある人々や社会的弱者に対する〈憐憫〉（と蔑視）を抽出する。そして、弘安の自立が、これら徳目の相互関係の中でめざされたこと、これら全体が、近代に内在する必然としてあったことを論じる。

最後に、近代史学の民衆像の議論に還って、それらと、本稿の近代民衆像の差異について論じる。もって、仮説ながら、〈もう一つの〉民衆像の提起となす。

キーワード：近代民衆，自立の構造，生活倫理

1 民衆と自立の問題

1.1 米騒動¹⁾と民衆²⁾

1918年8月11日未明、金沢（市）水車町の建具師堀内某が、米価暴騰に困り果て、火見櫓の鐘を乱打した。象嵌職人・米澤弘安（以下弘安）は、その事件を日記に記す。「今朝の警鐘乱打は、生活難ニ苦められし水車町の人が巴町の警鐘を打ったので、火元は十間町の米穀取引所だと云って群集ニ破壊さすべく謀たてたるものにて、捕われし由」[1918.8.11]³⁾。市内の白米（下等）1升の小売価格は、1918年7月1日27銭5厘、15日29銭5厘、31日31銭、8月5日37銭、10日40銭5厘であった。12日夜、大衆免（たいじゅめ）⁴⁾の箔打工（金箔を作る職工）が宇多須神社に集結する。亀井某らが「米価暴騰に対する措置は当をえていない、市当局等に警告しようではないか」（『北陸毎日新聞』1918.8.13）と演説、後、4隊に分かれて市中へ繰り出し、米屋に1升25銭の廉売を要求して回る。総勢3000人余。13日も兼六園に3000

人余が集結し、6 隊に分かれて繰り出す。この時、警官や憲兵が出動し、逮捕者を出す。逮捕者中、25 人が起訴される。起訴者の内訳は、箔打工 8 人、日雇 6 人、人力車夫 3 人、大工 2 人、その他の職人 4 人等である。金沢の米騒動は（も）、職人を中心とする細民層が担った。大衆免では、箔打工が地域ぐるみで参加した（橋本哲也 1995:203-219）。

弘安は、日記に、米価暴騰について書く[1918.2.27;5.2;5.11]。8月11日、名古屋の米騒動について書く[1918.8.11]。12日、金沢の米騒動について、「（夜10時頃叔母宅にて）話して居ると芳野（妻）か又来た 今夜は物騒な晩で一人で帰れないとの事」「米價は四十五錢二騰り、下級民は堪えられなくなった 今夜、宇多須神社に集合してそれより各米商及富豪へ嘆願に出掛たのだとの事 数百の人が押出した由 僕等の帰る時も浅の川大橋上は、また澤山の人か集まって居た堤町の鈴木米店二人か七重八重二垣を作り、巡查、憲兵か出張して居る 簾賣せると談判中との事 宅へ帰ると、泉屋の奥様が出て居て其話をして心配して居られた 十一時帰宅」「金沢米騒動（一千餘の大集團、富豪、米商を歴訪す） 米價は愈々高騰し、一舛四十五錢を、称え猶極まる所を知らず 十二日夕頃より宇多須神社の境内に誰云ふとなく集まれるもの数百に及び、米高を絶叫し、熱狂的演説の決果、午後八時群集は観音町より橋場に出で、尾張に至り 大々的示威運動を試むる所あり」[1918.8.12]と書く。13日は、「夜、純一（甥）と安江町より尾張町、浅の川大橋、梅の橋を廻り来るに、人手は非常に多いが不穩の景勢なし」[1918.8.13]と書く。その後も、各地の米騒動、報道管制、政府の対処、米価の推移について書く。8月26日未明、弘安宅に泥棒が入る。弘安は、その事件を「清二（弟）が夜半二時半頃便所へ行き、火鉢の側で一服喫んで床に入らんと背戸を見しに、一人の壮漢雨戸の外に屋内をうかひ居るを見る しいと見て居るも、先方も感付れたと見て急足で後の垣を越えて逃走したと 俄に戸締を検め、二階の雨戸も閉て寝直す 世の中か米價の爲物騒となり、鼠賊も又多くなるらしい 戸締を嚴重にす」と書く[1918.8.26]。……米騒動の主体となった細民層（箔打工や日雇、人力車夫等）と、米価の高騰を案じつつ、米騒動を「物騒なこと」「不穩なこと」として傍観した職人弘安。そこには、民衆の米騒動に対する対称的な態度があった（ただし弘安は、米騒動の様子が気に入り、13日には市内の様子を見て回っている）。

1.2 近代と民衆像

1960～70年代、近代民衆をめぐる議論が沸騰した。そこで、どのような民衆像が描かれたのか。ここで、その議論を素描する。まず、マルクス主義の民衆像である。それは、民衆は権力の対極にあり、民衆意識は支配的な思想と根本から異なり、民衆は権力と闘って生活を防衛した、というものである（田口 1971:81-85）。次に、安丸良夫の民衆像である。丸山真男は、荻生徂徠や福沢諭吉の近代的思惟を論じた。吉本隆明は、そこには民衆思想への関心がないと批判した⁵⁾。こう述べて、安丸は、吉本を、その民衆幻想論は「民衆本質論」であり、そこには「民衆意識の歴史性」の視点がないと批判する（安丸 2001:60）。そして、「通俗道德」の概念を提起する（安丸 1965.5:1）。通俗道德とは、地域の支配層が「儒教道德を通俗化」し、民衆に注入してできた生活倫理（勤勉、儉約、孝行、和合等）を指す（安丸 1968:37）。通俗道德は、民衆に「禁欲的生活規律」を自覚的に促し（安丸 1965.5:13）、民衆は「自己形成・自己鍛錬」をなし、

その過程で膨大な「社会的・人間的エネルギー」が噴出し、それが、日本近代化の原動力（生産力の人間的基礎）となった（安丸 1965.5:5）⁶⁾。他方、禁欲的な生活態度は、人々に一定の生活向上をもたらした。そのため、「道徳的優者が経済的社会的優者である」とする倒錯した表象が生じ、「自己責任の論理」が先行し、それが、民衆の批判精神を削ぐこととなった（安丸 1965.7:55）。通俗道徳は、民衆の生活を制約する諸々の条件を隠蔽する、「非人間的な強制」「虚偽意識の体系」（安丸 1968:36）と化した。

安丸の通俗道徳論に対して、批判が出された。一つ、布川清司の批判である。布川は、民衆は、「通俗道徳をつきつめる」という受身的・消極的な面ではなく、「通俗道徳をつきやぶる」という能動的・積極的な面において、社会批判を行ない、歴史を形成したのであり、通俗道徳からの逸脱にこそ、歴史変革の力があつたとした（布川 1975:61）。民衆は、権力者に本能的な断絶感をもっており、通俗道徳の実践の奨励をホンネで受け入れるような「お人よしではなかつた」（布川 1975:58）。これは、安丸と正反対の民衆像である。二つ、安丸の同質的な民衆像への批判である。ひろた・まさきは、民衆を豪農層・底辺民衆（自作農・貧農等）・奈落と辺境の民衆（被差別民・アイヌ等）に層化し、底辺民衆は「共益の権威を分有」することで、奈落と辺境の民衆と「自己を峻別し、自己を定位させようとする」（ひろた 1978:34）とした。中村政則は、通俗道徳論は、「小所有者が支配的だった原蓄期」で通用する議論であり、資本に搾取される労働者が勤勉に働いても、生活向上が約束されることはない（中村 1977:7）、また民衆内部には「差別分断的構造」（中村 1977:5）があり、囚人・被差別部落・朝鮮人の労働者も重要な民衆史研究の対象であるとした。さらに安田常雄は、民衆の特権化（主体化）は、必然的に「他者という外部」をつくり、それを隠蔽することに繋がる（安田 2004:65）とした。三つ、鹿野政直は、もう一步突込んで、民衆内部の分断は近代化の必然であるとし、焦点を近代化批判に向けて、次のように論じた。草創期の労働運動は倫理主義的性格を帯びたが、それは労働者の脱貧民化の徴表であつた。他方、近代化にもかかわらず救われない階層が残つたが、それはむしろ、近代化ゆゑに救われない階層であつた（鹿野 1968:56-57）。

1.3 民衆と自立

ここで、これらの民衆像について、本稿の目的に照らし、次の諸点を確認しておく。一つ、近代民衆は固有の生活倫理をもつていた。二つ、近代民衆は、層化され分断されていた。三つ、その層化と分断も近代の産物であつた。このような確認を、冒頭の米騒動の話に重ねてみよう。するとそこに、次のような民衆像が浮かび上がる。一つ、民衆の間に米騒動に対する態度の差異があつた。民衆には、（生活の困窮度に規定され）米騒動に参加する民衆と、それに共感しながら、騒動から距離を取る民衆がいた。二つ、そこには、生活の困窮を凌ぐ2つの戦略があつた。一方に、平常世界に止まり、勤勉・禁欲・儉約の努力により困窮を凌ぐ民衆がいた。他方に、そのような努力の無駄を悟り、直接行動により生活を防衛する民衆がいた。いずれも、近代民衆の生活戦略であつた。三つ、民衆の生活戦略の背後には、生存（貧困からの脱出）の欲求、つまり〈生活の自立〉の志向があつた。「飯を食う」は、いつの時代も民衆の最大の関心であつた。しかし、近代民衆の〈生活の自立〉には、固有の背景と構造があつた。

労働・農民運動の高揚の中で起きた米騒動は、1918年夏の延53日間、全国300の市町村に及んだ（平田 1968:49）。それは、広範な階層の人々が参加した、近代日本初の全国的な運動となった。近代民衆史は、そこに、近代民衆と市民社会の出現を見た。搾取と抑圧に苦しみ、それらと闘う民衆。これが、支配的な民衆像であった⁷⁾。研究者はそこに、自立する近代民衆を見た。他方、職人弘安は、闘わず、平常世界に止まった。しかし彼は、伝統に囚われた「遅れた」民衆ではなかった。それどころか、彼は、自立を厳格に志向する人であった。その意味で、弘安も、闘う民衆と同様、近代の民衆であった。闘う／闘わないは、近代の覚醒の差異（覚醒した民衆／覚醒しない民衆）ではない。それらはいずれも、民衆の〈生活の自立〉の回路であり、実践であった。また闘う／闘わないは、画然と区別された2つの民衆類型ではない。弘安は、闘う民衆の心情に熱く共感した。他方、民衆は、躊躇しつつ米騒動に加わっただろう。その上で、弘安と民衆の行為は分岐した。

本稿の関心は、闘わない民衆にある。闘わない民衆は、生活の自立をどう志向したのか。そこに、どのような生活倫理が動員されたのか。ここでは、職人弘安を事例に、闘う民衆・箔打工との対照を念頭に、闘わない民衆の自立の構造を分析する。そして、自立の二側面・解放性と抑圧性についてみる⁸⁾。近代は、人間を封建的桎梏から解放し、人間に精神の自立を促した。また、人間を市場社会に投げ込み、人間に自力の自立を促した。これを、自立の解放性と呼ぼう。他方、生活と精神の自立は、2つの他者関係を結果した。一つ、（自立した）同類の人々との和合である。自立（の状態）は、防御されなければならない。二つ、（自立しない）異類の人々の異化である。自立しない他者は、自立の攪乱者である。ゆえに、隔離されなければならない。これを、自立の抑圧性と呼ぼう⁹⁾。

2 弘安の階層世界

2.1 米澤日記

本稿は、職人弘安の階層世界と生活倫理を分析する。そこに、（闘わない）近代民衆の自立の事例を見る。見田宗介は、個人の生活史に「社会構造の実存的な意味」を読んだ（見田 1979:9）。中野卓は、個人の生活史に「日本近代の歴史的現実」を読み、そこに歴史を「柔軟に再構成する」可能性を見た（中野 1995:194,216）。こうした方法的関心に通じ、筆者らは、先に、（無名の）個人の生活史から歴史を読み解く方法的な仮説を提示した（古屋野・青木 1995:71-73）。そこで、日記から、日記に記録された時代（記述された歴史的事件）、日記に表現された時代（時代が課した生活行為）、日記に解読された時代（記述された行為の時代性の解釈）が読めるとし、分析的に、個人と歴史の間にコーホート（一定の暦年時間に人生上の経験を共有する人口集団）を挿入し、もって個人と歴史を繋げる媒介とした。本稿は、この方法に準拠して、個人の生活史から歴史を読む作業としてある。

本稿は、『米澤弘安日記』¹⁰⁾を材料とする。弘安は、1906年～72年の間に、400字詰原稿用紙で4336枚に及ぶ日記を書いた。その大部分は、23歳～37歳（大正期）の、生活がもっとも充実した時期に書かれた¹¹⁾。文は、カタカナとひらがな併用の半文語調で書かれた。中身は、月

日、曜日、天候、気温、本文の順で、本文は天候に続き、日々の出来事（家族や周辺の人々の行動、結婚・葬儀・仕事・旅行等）、政治・社会の出来事（政治・軍事・皇族の動向を新聞記事の抜粋で）が書かれた。日記を書くには、書き手に、相応の条件がなければならない。一つ、書き手に読み書き能力があること。弘安は、高等小学校を卒業し、その後帝国中学会（通信教育）を修了した。二つ、文字を書くことのバリアが低いこと。弘安は、新聞を読み、手紙を書き、図書館へ通った。日記に、「新聞」が 438 回、「手紙」が 735 回、「図書館」が 180 回、「本」が 5101 回登場する。三つ、毎日書くことが可能な時間帯があること。弘安は居職で、生活の場が固定し、生活リズムが範型化されていた。「色々話して帰りしは、十一時半 此日記をつけて寝たのが十二時」[1913.6.27]。四つ、書き手に、生活を反省する、出来事を記録する等の動機があること。「正月中讀ンダ書物中ニ、日記ノ必用ノ事ヲ書テアツガ、今日カラ稽古旁々書イテ見ヤウ ドコ迄續ク續クトコ迄」[1908.2]。「コノ事件（借りてもない物を返せと言われたこと）ニ付キ感セシ事ハ、…借物ハ直接渡ス事 日誌ハ一層明細ニ記ス事ナリ」[1911.1.31]。五つ、日記を続ける意志があること。日記には、中断・再開・まとめ書き・前後不順がある。忙しい時、外泊した時は、中断か、後日まとめ書きされている。「七月廿八日…東京へ行く 八月九日夜帰宅す 其間の日記ハ別ニ記す」[1914.7.27]。「（年末は多忙で）日記を書く暇とともなく、只記憶ニ存するもののみを書き置く」[1918.12.24]。

日記は、弘安の生活倫理（後述）に適合的な生活行為であった。日記を書く条件は、書き手の相応の階層的地位を前提とする。これまで、日記は、上層・知識層が書いた日記が多く、民衆が書いた日記は少なかった。民衆には、日記を書く条件がなかった。弘安は、上層・知識層でもなく下層民でもない。『米澤日記』は、日記階層の境界域にあった。

2.2 加賀職人

日記分析に入る前に、弘安の生活倫理の基盤をなす、加賀（金沢）職人、弘安の階層について概略見ておく。金沢は、明治維新後、城下町から近代都市になった。しかし、新たな産業基盤はなかった。「土族は疲弊困頓し、商人は檀家失いたるお寺さまとなった」（北國新聞 1893.11.30）。金沢の人口は、1873 年 12 万人から 1900 年 8 万人まで減少し、その後増加に転じ、11 年 11 万人であった（北陸放送 1992:43）。職人は、顧客の武士が消滅し、藩の庇護（職人扶持や細工所等）を失い、没落の道を進んだ。職人保護の施策がとられ、共励会・奨励会が設立されたが（明治期前半は旧職人の保護、後半は職人の創出に重点が置かれた）、没落の道は阻めなかった。象嵌職人では、1877 年に土族授産事業の銅器会社が設立された。しかしこれも、1894 年に解散された。大正期、新たな顧客層の開拓と、工芸品の輸出により、職人が一部活気づいた。弘安も恩恵を蒙った。「仕事か非常ニ込んで、何より手を付てよいか知らない。与程働かねばならぬ」[1918.9.8]。しかし昭和期に入り、金融恐慌、金属資材の統制で、工芸産業は壊滅の道を進んだ。「衰退の一路をたどる加賀の金属工芸 徒弟の養成も閉却され重要産業の前途に杞憂」（北陸毎日新聞 1935.1.30）。1939 年に 14 人いた象嵌職人は、45 年には 1～2 人であった（田中 1974:166）。

2.3 弘安の階層

米澤家は、代々刀装金具職人であった。「予カ白銀職八累代ノ業務ニシテ、数代金沢旧藩前田家ノ御用を蒙り武器方等諸細工被申付、私に至り六代れんめんとして御用相勤メタル」（沿革開業）（田中 1974:14）。父清左衛門は、元細工所職人で、銅器会社の職工監を務め、工芸作家としても活躍した。兄光雪は、名古屋で絵師となり、弟清二は、象嵌職人として弘安を支えた。妻芳野の父は、元家老家へ出入りの表具師であった。このように、米澤家は、家系・姻戚関係において職人上層にあった。

弘安は、12歳（1899年）より父に象嵌細工を師事する。兄が名古屋へ出て、弘安が家業を継ぐ。象嵌仕事は、弘安・父・清二が行ない、妻と母がこれを手伝う。雑誌『共働』の広告には、「金属美術製作所 加賀象眼、彫刻、花瓶、香炉、置物類、其他装身具美術注文ニ応ズ可ク候 金沢市宗叔町三番町△番地 米沢弘保」[1913.10.18]とある。清二は1922年に分家し、以後、弘安に雇用される。時々、徒弟が通ってくる。弘安は、職人仲間で、仕事・材料・労力において助けあった。また、親族から仕事を紹介される等の助力を受けた。とくに妻の父からは、しばしば資金援助を受けた。

職人世界における弘安の階層は、家系とネットワーク（著名作家との交友）において、上層～中層にある。顧客には、旧藩主の前田家、韓国皇帝の李王殿下がいた。展覧会では、度々入賞した。1916年美術工芸展に初入賞、25年パリ万博で名誉賞、28年帝展に初入選、68年県無形文化財保持者、72年文化庁無形文化財保持者等、弘安は、名声を博した。しかし生計の面では、中層～下層の位置にあった。家業は零細な家内工業で、材料購入の資金に苦労した。作家活動は、家計を圧迫した。二階を貸間にする[1924.8.16]位いでは間に合わない。明治期に仕事が激減し、大正期にやや回復し、大正期末から激減し、1932～33年には、注文がゼロとなる。戦時下の貴金属統制の中、象嵌仕事はほぼ壊滅していく。弘安はついに、長男の家業後継を断念する。逼迫した家計を支えたのは、妻である。裁縫で手間賃を稼ぐ、実家の資金援助を得る。弘安の米騒動への共感の背後には、こうした家計の事情があった。職人として中層～上層、生計において中層～下層。これが、弘安の階層世界であった。

3 弘安の生活倫理

3.1 箔打工

箔打工は、浅野川向いの大衆免に住む貧しく、蔑視される職工であった（小林 1990:108）。「箔で育って箔で納まっていこうと考えとるワシや、箔で死んで何ンがわるい」（田中 1992:154）。箔製品は高級品で、市場開拓が困難で、箔工業は零細であり、近代化が困難で、商人資本の支配が続いた（橋本 1995:196）。箔打工には、職人氣質が強く（「箔打ちはバクちうち」）、仲間意識も強かった（箔同業組合は、米騒動の起訴者の釈放嘆願書を2度も警察に出した）（橋本・林 1987:136）。他方、彼らには、権利意識が強かった。それは、劣悪な労働条件だけでなく、2人1組で作業をしながら、世間の動向を語りあい、社会意識を醸成するという仕事環境によるものでもあった（古屋野 1995:19）。明治後期すでに同業組合（工部）を結成、労働争議を

頻発させた。1921年には、職工1700人余の内1500人が争議に参加する勢いであった（橋本・林1987:194）。これが、闘う民衆・箔打工の階層世界であった。

3.2 分析方法

他方、弘安は闘わない民衆の一人であった。以下、闘わない弘安の生活倫理を、日記と関連文献によって素描する。日記の解読は、概略、次のような手続きを取る。まず、日記を熟読し、出来事をめぐる態度と行為の（一貫した）特徴を抽出する。次に、それらを生活倫理の表出として解釈する。次に、生活倫理の徳目を抽出する。次に、徳目間の関係を定める。これらが、近代民衆史の議論を導きの糸とし、手探りで行なわれる。生活倫理を直に表象する言葉や文のシンボリズム分析を行なう。エクセル形式でデータベース化されたパラグラフ（総数 34,980）で、シンボルの登場頻度を出し、日記の解読に資する¹²⁾。とはいえ分析は、手探りの域を出るものでない。描かれる生活倫理は、仮説に止まる。

3.3 生活倫理

① 責任

弘安は家長であった。家長は、家計維持の責任を負う。兄の他出後、家督と家業を継いだものの、収入が安定しない弘安に、責任感は強かった。責任感こそ、弘安の生活倫理の根幹をなした。弘安は、仕事があり、生活も充実した大正前期の新年元旦に、一年の責務を確認し、家業に励むことの覚悟を、日記に書いた。「今年こそは懸命ニ家業を勵み、腕を研かんと誓ふ」[1915.1.1]。「（仕事は）父及清二、僕の三人腕揃となつた、この時、大二活動して土壺を造らねはならむ。望多き年だ。特ニ僕の双肩ニ掛つてるやうだ」[1917.1.1]。「昨年十月には父の発病に依りて、業務一切は僕の責任重く、引受せざるべからざるに至る。且、十一月嫁を貰ひしによりて、此処ニ一家軸となる事となれり。一手の外ニ味方なしと思ひ、勵むより外なしと覚悟せり」[1918.1.1]。「吾家事の方も僕に非常な責任を負担するやうになつた。本年ハいよいよ父と呼れるやうになる事であるが、養育の責任が生じて来る。又、清二には、嫁を取って別家させる事、之又重大なる責任である。兄と清二への分配金¹³⁾、之も僕が働いて仕拂ねばならず、父は働いて下さるが、今では年の勢が依然ほど精出せず あしめる方が無理にて、どうしても今後は、僕一人の力で全責任を負ふてやうに行かねばならぬ。躰が幾つあつても足りない」[1919.1.1]。

② 勤勉

責任感に燃えた弘安は、寸暇を惜しみ、仕事に励む。研究心も旺盛である。帝国中学会に入る、図書館に通う、講習会・講演会・展覧会に行く。謡曲や茶道の趣味も、仕事の内である。金沢では、謡曲・茶道・華道の嗜みがなければ、仕事も貰えない。「遠藤様はいろいろ話なされた中ニ、職人は一生研究するものにて、多く見、多く聞の方よく、道具市などにはつとめて見るべし。よく見、よく腹に納むれば、暇より以上の徳あるなり」[1914.2.22]。弘安は、時間を節約し、生活を合理化する。「清二は草花市を見二行き二時間以上も帰らなかつた。ノンキなものだ」[1913.8.13]。「夜、涼に出て、近衆の若連中と雑談して居たが、時間の空費をおしき感がしてならなかつた」

「1913.7.17」。「日本人は何故ニ此貴重なる時間を貴ばざるか。若し汽車汽船に一二分を失はば半日若くは一日を失ふことあるにあらずや。以て時間の貴重なることを知らざるべからず」[1915.1.7]。また勤勉は、禁欲・儉約・質素の倫理を導く。弘安は、弟や友人の放蕩を批判する。「天地君や山谷君が乗テル 他ハシカト解ラヌガ廓ヘ行ク様子デアツタ ドウモ困タ人達ダ」[1911.4.1]。「昨夜清二は帰つて来な可つた 天地方を聞合すと天地君も帰らな可つたと云わる 悪友ニ誘はれ遊ニ行つたのだらと打ちやて置いた 十二時少し前ニ帰つて来た 怪しげなる言譯をして 一つ二つ言つて聞いた時々始めるから始末こいけない」[1913.5.8]。「清二は此間遊興費、今日先方へやる約束との事色々問答の末、寛容にして十円貸した 重々説諭やれた これで改心せねばよくよく駄目な奴だ」[1913.5.22]。

③ 革新

いい仕事を得るには、象嵌技術を磨き、作品の新分野を開拓しなければならない。作家活動は、作品を高く売るため、また、名を売って仕事を増やすためにある。「金工で一番苦心すつのは着想です。原型までが骨折れます。原型ができるとあとは彫金して象嵌です。象嵌は自分の手馴れたもんやから、根気よう精出しゃア、やっていけるもんでス 出品しなア、名ア、通らんしネ」(田中 1974:111)。弘安は、意匠を工夫し、新作品に挑む。材料は高価で、家計を圧迫する。製作中は日常用具の仕事はできず、それも家計を圧迫する。しかしそれでも止めない。「現今の意匠圖案界は複雑をきわめて居る。其内ニ流行がある。吾々に流行ニ遅る事なく種々なる物を見それを参考として自分ノ思想を加へて新キジクを出さねばならぬ」[1913.12.3]。「(知人が言うに)職人ニ限らず、自己の考にて一派を立つれば、これ程満足なし。なるべく自己の特長を發揮して、一寸人の出来ぬる作り出せと、又品物は人の長く見るものを造れと」[1914.2.22]。「展覧会の作品は技術ばっかしでもいかんがで、デザインが相当大事です。型破りのもんせんないかんがです。去年なんかの伝統工芸展では、わたしア、二品の火箸を出したんでス。細かい細工をして、高い技術を使った象嵌の火箸が落選して、長芋の形した、ズボンとした形の火箸が当選したんでス。長芋形の火箸ア、近代的だとみなさんおっしゃいますが、こういう傾向になつとるわえや。入ったけりア、時代に合わせ出品せん。伝統からむけていかんなんがや」(田中 1967:55)。

④ 和合

勤勉で、革新的な生活態度は、生計の安定に機能的である。他方、生計の安定と家族の平穩を得るには、環境(人間関係)が秩序的でなければならない。でなければ、安定と平穩の展望が見えなくなる。展望を確実にするには、周囲の人間関係を、安定と平穩が計算可能なように調整しなければならない。そのため、弘安は、仕事・近隣・宗教(寺社参拝)・趣味・団体旅行で交わる人々と、積極的に調和する。弘安は、友人の世話を焼き、募金・寄付活動に奔走し、催しや行事に積極的に参加する。火見櫓の鐘が鳴るや、真夜中であろうと、火元が少々遠かろうと、駆け参り、家財道具の運び出しを手伝う。火事見舞いも丹念に行なう。日記の中の火事記述(どこで起きたか、どんな世話をしたか)は、1906～33年に147回に及ぶ。そこには、世話好きを越えた、和合への強い動機がある。「父は、世の為人の為に骨惜しみせずに奉仕する人でした。……父は、

世の中は善人ばかりいて争いが絶えぬ、私が悪かったと云う悪人ばかりだと平和なのだがと申しております」(娘談) (片桐,1995:207)。「今日一日三つの恩を忘れず 不足の思を爲さぬこと 今日一日腹を立てぬこと 今日一日嘘を云ひ無理を爲さぬこと 今日一日人の悪□云ひ己れの善を云はさること」[1911.12.31].

弘安は、家族の平穩と環境の平安に感謝する。その感謝の深奥には、天皇がいる。弘安にとって、天皇は至福の源泉である。「元旦！何となく新しい心持になる 殊二本年は御諒闇の雲、全くはれ國民は先帝の御威徳を感謝すると同時に又、今上陛下の御愛撫を有難く思はねはならぬ」[1914.1.1]. 明治天皇の死は、深い悲しみである。「我が大君の第一新年と思へは嬉しきが、又、先帝の御遺徳を考ふる時は、何となく神上らせ給ひし事の痛わしく、さみしさ感ず」[1913.1.1]. 天皇の敬愛は、イデオロギーを越えた生活感情となる。「毎年年の初め二思ふ事、一年の終りに顧れば其数分の一にも達せられない事を思ひば心元なきか やれるだけはやって見よう 床には今上陛下の筆にて力行不惑と書いた掛物が掛られてある これだ 起きて裸体となり背戸ニ出でバケツの水をかむる 氣がすっきりする」[1915.1.1]. このような天皇観は、弘安だけのものでなく、当時の民衆に一般的なものである。天皇心象は、(闘う人々も含め)民衆に身体化されていた。

⑤ 憐憫

弘安は、身近な人々との和合を図った。それは、同類の人々との和合であった。他方、弘安は、不幸な境遇の人々に憐憫の情を抱いた。時には、憐れな動物に不遇な人々の悲哀を重ねた。「病犬が何日も憐家の軒下二居た 之八竹俣そば店二飼ふてあつた犬であつたが、同家が立ち去つてより、放浪して食物をあさり歩き居しがいつしか躰二できもの出で漸次、擴まり、首うなだれて衰の姿となつたが遂二今日倒れ苦き聲を上げ鳴き居しが次第二元氣なく夕頃二落命した 畜生なから可愛想二思つた 人間でも加様の運命の人もあらう」[1916.3.3].「一人の女盲人が傘も持たずとぼとぼ歩んで居るから何処へ行のかと問ふと東廓への事故、宅の前迄傘二れて来て宅より傘を貸した點字の本を三社五十人町へ行つて借りて帰る途中なりと 不自由なものだ」[1919.3.8].「町内の火事 長屋八戸一棟の焼失あり 大賑をする 何分火の早いの一棟故忽ち焼け落ちた 多くは日雇の人達にて、働きに出て居た事とて家財全部の人多く、実二氣の毒であつた」[1933.5.14]. 憐憫の情は、身近な人々との和合と対をなす。弘安にとって、不遇の人々は「ああでなくてよかった」と、家族の平穩を確認する存在であった。不遇の人々は異類の人々であり、人々への憐憫は、優位な立場から越境した情念であった。油断したり、運命の悪戯で、たちまち自らも不遇な境遇に陥りかねない。不幸はすぐ側にあった。不遇の人々は、近い存在であった。だからこそ、その人々は、勤勉・革新・和合の大切さを論じていた。「焼跡を見廻して居ると、火元の夫婦が謝つて歩いて居る。主人は、二階より墜ちして足にホータイし、杖を持って居る。惨たる有様、因果の事なり」[1914.4.12].「松本様も不幸の人達だ 娘様三人を一年の内二死なされ其後長男と末子の男子も死なれ、長崎へ幼き頃養子二行かれし健次、鈴栄の二子二頼りて家を賣り孫を連れて行かれしなり」[1919.8.14].

不遇の人々への憐憫は、その人々への蔑視と対をなす。弘安も、社会的弱者に対する「世間並みの」偏見を抱いていた。「不景気ですなア 門松除れて猶ほオンボ(「隠亡」)のことで、墓守・埋葬を業とした人々の賤称) 萬歳の亡國の音を聞く オイオイ戸惑ひしちや不可い」[1908.2.16].「私生

児を分娩し、謀殺嫌疑の調を受け居る娘あり 淫奔の果は恚うしたるもの也 浅猿し][1908.2.24]. 近所に精神障害者がいた。彼がしばしば、仕事場に遊びに来た。弘安には、それが煩わしかった¹⁴⁾。「例ノ△(人名)ガ来タ 精神病者ハ仕様ナイモノダ][1912.6.22]。「夜、△の[氣違]が遊ニ来た 困るね][1914.3.12]。社会的弱者の蔑視は、最後は、イデオロギーと合体し、民族中心主義に至る。そこにも天皇がいる。「今日八紀元ノ佳節ニシテ、…百二十一代二千五百七十餘年皇統連綿トシテ天壤ニ窮マリナク、加フルニ朝鮮ハ領土トナル 大ニ祝スベキナリ][1911.2.11]。

4 近代民衆像の転回

4.1 自立の構造

以上、弘安の生活倫理の構造をみた。家業を継いだ弘安は、生計を支え、家族の平穩を達成する責務があった。そのため弘安は、寸暇を惜しんで仕事に励んだ。作家活動も、生計維持が目的であった。他方、弘安は、生計の維持と家族の平穩を確実にするため、(仕事や近隣の)同類の人々との和合を図った。それは、(不運の人々や社会的弱者の)異類の人々に対する憐憫と蔑視と一体のものであった。こうした生活倫理は、責任→勤勉→革新→和合→憐憫の徳目の連鎖としてある。責任と勤勉は、禁欲的な生活態度を生む。そこに、弘安の<生活の自立>の意志があった。そしてそこから、和合と異化の他者関係が生じた。こうして、自立の意味と構造が、改めて確認される。一つ、生活の自立は、市場社会に投げ出された弘安の生活戦略であった。自立は、丸ごと近代の産物であった。二つ、自立は、和合と異化の他者関係によって、確かなものとなった(と思われた)。異化は、自立の必須条件であった。ゆえに異化も、近代の産物であった。三つ、それは、闘わない弘安が平常世界に止まり、そこで生活の自立をめざす姿であった。四つ、それは、非平常世界で闘う民衆の、異化なき自立(もしあったとすれば)と対をなした。異化する/異化しないは、近代民衆の、2つの他者関係であった。

4.2 伝統/近代

弘安は、生計の維持と家族の平穩のため、生活を方法的に合理化した。勤勉・革新・和合・憐憫は、それに機能的な生活倫理であった。もとより、弘安は、仕事・家族・近隣の伝統的な集団主義に縛られていた。象嵌仕事は、家業として継承した。弘安は、家父長的な夫であり、父であった¹⁵⁾。近隣も、伝統的な秩序の内であった¹⁶⁾。しかしそこには、近代/伝統の価値を使い分ける弘安がいた。伝統的人間とは、伝統的価値を伝統ゆえに実践する人をいう。そこに価値選択の余地はない。これに対して、弘安は、価値選択の主体であり、集団主義を合理的に動員する主体であった。その時、集団主義は、絶対的価値から相対的価値へ変容した。その機能は、秩序の自己目的的な維持から、生存のツールへ変容した。「伝統とは近代が作られていくなかで、近代の方から発明した『過去』である」(橋本満 1992:61-62)。伝統とは、まさに近代の構築物である。近代は、過去を脱構築し、自らの確立へ動員する。こうして、伝統的価値に「縛られた」、近代民衆の自立の構造が、一元的に説明される。伝統と近代ではなく、近代の中の「伝統」となる¹⁷⁾。

4.3 近代民衆史再考

ここで、近代民衆史の議論に立ち還ろう。安丸は、儒教に発する通俗道德の、村落支配層から民衆への伝播を説いた。そして、その禁欲的生活規律に、近代化の人的基礎をみた。因みに、近代化の人的基礎を儒教に求める議論は、Bellah 以来、日本近代化論の主流をなす（1957=1966）。しかし、本稿の自立は、通俗道德とは異なる（主流の日本近代化論とも異なる）。一つ、自立の生活倫理は、儒教に根ざす通俗道德とは異なり、近代の産物である。それは、市場社会に投げ出された人間の処世哲学である。それが、近代民衆の生の起点である。それは、前近代に発しつつも、前近代と隔絶されている。二つ、自立は、「自己責任の論理」（安丸 1965.7:55）を生む。しかしそれは、通俗道德のように、過剰な禁欲的な生活態度から生じた「虚偽意識」（同）ではなく、自立自体に内在する「真正意識」（筆者）である。三つ、自立の生活倫理は、支配層から伝播した倫理ではなく、市場社会の中で、生存のため余儀なくされた民衆の生活戦略である。それは、生存競争にある人々を内面から動かすエートスである。四つ、自立は、原蓄期の小所有者層に典型的な通俗道德とは異なり、近代の理念（自由・平等）に発する、近代人の処世哲学である。それは、支配層から民衆の末端まで、社会のすべての人々を包摂する。五つ、自立は、闘う論理にも、闘わない論理にもなる。闘う／闘わないは、自立の2つの回路にすぎない。

通俗道德論に対する批判は、2点に収斂する。一つ、民衆の道德は、支配層の道德とは異質なものである、という批判である。二つ、民衆も内部で分断されている、という批判である。批判には、マルクス主義的な民衆理解も、非マルクス主義的なそれも含まれる。本稿の通俗道德論批判は、これらとは異なる。まず、近代にあって、民衆の生活倫理と支配層のそれは、市場社会の生存競争に発する、同じ生活規律としてある。民衆の支配や収奪は、その只中で生じる。近代は、個の自立に貫かれた階級社会である。前近代は、その中で再構築される。次に、民衆内部の分断は、自立から生じる。自己責任の論理は、排除の論理である。また、自立は、和合と異化の他者関係を生じる。そこで、伝統的観念や慣習が機能する。そして、他者の分断（と差別）が合理化される。しかも、異化（排除）される民衆も、自立と自己責任の信奉者である。こうして、分断の合理化が完成する¹⁸⁾。「近代化にもかかわらず救われない階層」（鹿野 1968:56-57）も、「近代化ゆえに救われない階層」（同）も、こうして生まれた。

5 近代と現代

本稿で、『米澤日記』を材料に、事例を通して、近代民衆の自立の構造をみた。描かれた民衆像は、なお仮説に止まる。しかし、展開された議論の射程は遠い。近代史研究の対象は、権力エリートから民衆へ拡大した。そして、（自由民権運動や大正デモクラシーの）闘う民衆像が描かれた。安丸の通俗道德論も、民衆の生活倫理に歴史変革の原動力をみる点で、闘う民衆像の系譜にある。本稿は、これに闘わない民衆像を対置した。そして、伝統を脱構築しつつ市場原理に適応する、民衆像を描いた。それは、解放された近代人の民衆像であった。しかし、その生活倫理が、歴史変

革の原動力となったというのは、事後解釈にすぎない。実際、生活倫理は「新たな」民衆分断を生じ、その足枷は、現代に及んでいる。それは、抑圧する／される近代人の民衆像であった。

これらすべてが、近代に内在する必然であった。弘安の自立の構造は、その一つの範型である。それは、闘わない民衆を「遅れた民衆」「歴史の足枷」とみる通念に、異議を提起した。近代社会の解放と抑圧は、ポスト近代の自立と排除として、私たちをも呪縛している。こうして、近代民衆像の脱構築が必要となる。本稿は、その試論にすぎない。

[注]

- 1) 金沢米騒動の概要は、『米澤日記』（後述）の他、論文（橋本・林 1987:129-136）（橋本哲也 1995:203-219）等に依る。逐一の引用注記は略す。
- 2) この民衆は「庶民」ほどの意味である。民衆概念をめぐる議論には踏み込まない。
- 3) 『米澤日記』の注記は[年月日]と記す。漢字・文の誤りは原文のまま。下線は引用者。丸括弧内は引用者の補足。以下同じ。
- 4) 大衆免は、旧城下町東端の浅野川沿いの、近郊農村から困窮者が流入した地域で、東廓に隣接し、箔打工等の下層職工・職人が集住する細民地区であった。
- 5) このような丸山理解には異論もある。小倉充夫は、丸山は「トップ・レベルと社会的底辺での呪術性」の「構造連関の歴史的過程」を見たとする（小倉 1974:7）。
- 6) 小倉は、儒教に根ざす労働への内的駆動力に、資本主義の精神との機能的な等価性を見た（小倉 1974:11）。これも、安丸の近代化論と同じ系譜にある。
- 7) 共同体の伝統に埋れて生きた、闘わない民衆の存在も指摘された（田口 1971:85）。しかしその民衆は、歴史との関わりを断った消極的な人々として描かれた。
- 8) 大方の近代史観は、解放史観と抑圧史観に収斂する。近代が犠牲者を生み、その犠牲者が他者の抑圧者にもなるという近代批判も、珍しくない。しかし問題は、解放か抑圧かではない。いずれも近代の必然である。問題は、その関係の如何にある。
- 9) この自立が、ポスト近代の私たちをも呪縛している。2002年、同和対策事業が打ち切られた。その理由に、「同和関係者（被差別部落民）の自立」の必要が強調された。同年、（通称）ホームレス自立支援法が制定された。その目的に、「自立の意思があるホームレスに、雇用・住居・医療の支援を行なう」とある（自立の意志のないホームレスは勝手にしろ！）。2005年、（通称）障害者自立支援法が制定された。
小泉首相は、「必要なサービス確保をするためには、その費用について利用者の方々も含め、皆で支え合っていくことが必要と考えております」（参議院本会議での答弁 2005.7.26）と語った。新自由主義のもと、自己責任が称揚され、公的領野が私事化されている。近代は、封建身分からの個の自立に始まる。その自立が、福祉国家を経て、今、包摂と排除のイデオロギーとして蘇っている（渋谷 2003:46-67）。
- 10) 『米澤弘安日記』は、金沢市教育委員会の委嘱により米澤日記編纂委員会（委員長 古屋野正伍）が編集し、2000～03年に4冊本で復刻出版された。その作業（原本の解読、コンピューター入力、編集等）は、都市社会学研究所（所長青木）が行なった。

- 11) 弘安の略歴は、次の通りである。1889年－誕生、98年－尋常小学校卒業（成績2番）、99年－父の技術手解き開始、1902年－高等小学校卒業（首席）、05年－帝國中学会修了、06年－日記開始、17年－芳野と結婚、19年－長女誕生、22年－弟清二分家、長男誕生、23年－父死去、25年－次女誕生、28年－母死去、29年－三女誕生、33年－日記中断、53年－日記再開、71年－日記終了、72年－死去（85歳）。
- 12) 日記のデータベース化は、共同研究者の近藤敏夫氏により行なわれた。シンボリズム分析やシンボルの登場頻度の解釈手続きを、本稿で説明する余裕はない。
- 13) 兄弟への財産分与は、次のように行なわれた。まず、両親からの家督相続分から兄に400円渡し、次に、自宅を抵当に銀行から600円借り、弟の別家時に400円渡す。残り200円は、材料費と父母の葬儀代に充てる（田中1974:91-92）。
- 14) 弘安にとって煩わしいとはいえ、精神障害者がぶらりと遊びに来るといった光景など、今ではないだろう。当時は、精神障害者も地域で（いっしょに）暮らしていた。
- 15) 職人仕事は、個人技量への依存が大きく、能力主義的である（山本1991:315）、そのため職人には、農民や商人と異なり、仕事上の集団主義も発達しにくいし、「家意識も薄かった」（間1987:163）。その点で、職人は、そもそも自立に親和的であった。近代的自立と職人エートスの関係については、稿を改めたい。
- 16) 弘安は天皇を敬愛した。天皇は家族国家の頂点にあった。その点、弘安の意識は、伝統的ともいえる。しかしその天皇も、伝統の形象をとった近代の産物であった。
- 17) これは、歴史の構成主義に通じる。「『歴史』とは実体的なものではなく、主体的に解釈されることによって成立する」（成田2001:27）。
- 18) 不運な人々や社会的弱者も、自己責任の観念を抱く。それが、社会を支えた（ている）。この点の研究は、アノミー論から近年の社会的排除論まで、枚挙に暇ない。

[文献]

- 小倉充夫, 1974, 『資本主義の精神』論と社会主義の精神—社会変革と民衆の生活態度に関する比較社会学的一考察『社会学評論』日本社会学会, 25(1): 2-17.
- 片桐慶子, 1995, 『石川県人名事典』（現代編4）石川出版社.
- 鹿野政直, 1968, 「“近代”批判の成立—民衆思想における」『歴史学研究』青木書店, 341: 46-60.
- 小林忠雄, 1990, 『都市民俗学—都市のFOLK SOCIETY』名著出版.
- 古屋野正伍, 1995, 「技術と都市社会」林武・古屋野正伍編『都市と技術』国際書院, 11-23.
- 古屋野正伍・青木秀男, 1995, 「日記分析における『個人対歴史』の問題—金沢・象嵌細工職人の生活史研究のばあい」『人間科学研究』常磐大学大学院, 3: 65-76.
- 渋谷望, 2003, 『魂の労働—ネオリベリズムの権力論』青土社.
- 田口正己, 1971, 「日本の近代化と民衆—民衆意識研究ノート」『立正大学人文科学研究所年報』立正大学人文科学研究所, 9: 79-86.

- 田中喜男, 1967,『百万石の職人』北国書林.
- 田中喜男, 1974,『加賀象嵌職人—米沢弘安の人と作品』北国出版社.
- 田中喜男, 1992,『伝統工芸 職人の世界』雄山閣.
- 中野卓, 1995,「歴史的現実の再構成—個人史と社会史」中野卓・桜井厚編著『ライフヒストリーの社会学』弘文堂, 191-218.
- 中村政則, 1977,「日本近代と民衆」歴史科学協議会編『歴史評論』校倉書房, 330: 1-10.
- 成田龍一, 2001,『<歴史>はいかに語られるか—1930年代の『国民の物語』批判』日本放送協会.
- 間宏, 1987,「日本人の仕事意識の歴史」三隅二不二編『働くことの意味』有斐閣, 145-198.
- 橋本哲也, 1995,「地方都市下層社会と民衆運動」林・古屋野編『都市と技術』国際書院, 179-222.
- 橋本哲也・林宥一, 1987,『石川県の百年』山川出版社.
- 橋本満, 1992,「『近代日本における伝統の発明』シンポジウム」『ソシオロジ』社会学研究会, 37(1): 61-66.
- 平田哲雄, 1968,「米騒動研究の現段階」歴史科学協議会『歴史評論』校倉書房, 216: 1-10.
- ひろた・まさき, 1978,「日本の近代化と地域・民衆・文化」『現代と思想』青木書店, 33: 20-37.
- 布川清司, 1975,「書評 安丸良夫著『日本の近代化と民衆思想』」『日本史研究』創元社, 149: 56-61.
- 北陸放送株式会社, 1992,『激動の地方史』
- 見田宗介, 1979,『現代社会の社会意識』弘文堂
- 安田常雄, 2004,「民衆史研究の現在—『<帝国>との接点で』安田編著『歴史研究の最前線—新しい近現代史研究へ』吉川弘文堂, 48-85.
- 安丸良夫, 1965.5,「日本の近代化と民衆思想（上）」『日本史研究』創元社, 78: 1-19.
- 安丸良夫, 1965.7,「日本の近代化と民衆思想（下）」『日本史研究』創元社, 79: 40-58.
- 安丸良夫, 1968,「近代化過程における民衆道徳とイデオロギー—編成」『歴史学研究』青木書店, 341: 32-45.
- 安丸良夫, 2001,「民衆的規範の行方」『現代思想』青土社, 26(16): 57-73.
- 山本正和, 1991,「職人の『家』の変化と家族」『社会科学』同志社大学人文科学研究所, 47: 307-325.
- 米澤弘安日記編纂委員会編『米澤弘安日記』上巻（2001）・中巻（2002）・下巻（2000）・別巻（2003）大学教育出版.
- Bellah, Robert N., 1957, *Tokugawa Religion: The Values of Pre-industrial Japan*, New York: Free Press. (= 1966, 堀一郎・池田昭訳『日本近代化と宗教倫理』未来社.)